

開催日時：2022年9月15日（木） 17:00-18:30

開催場所：オンライン会議

参加人数：川添 会長（NTT）ほか11名

議論の主なテーマ：総合知活用の推進について

プログラム概要：

- ・内閣府より総合知の説明
- ・意見交換

・意見交換おける主な意見

（場の構築）

・ビジョン共有型共同研究プロジェクトというものがある。これは、ビジョンを創り、企業と大学にお互いにコーディネーターを置いて、課題解決に向けた適任者を選ぶようなことをしている。大きなビジョンを掲げて、コーディネーターが価値を考えると、学術領域を考えるとそこからスタートするため、参画する先生も増えてくるので、プロジェクトとしては10倍くらいの規模のことができる。場合によっては人文系にも入ってもらい、法律の議論も入り、優先順位に関する議論も発生するなど、そういうことも総合知だと考える。

・ポイントは、ある領域の中のドメイン的知識を持った人を集めることである。ある業界で本当に良くなることを、ドメイン的知識を持った人が知っている。そのような人をどのように見つけて表に出していくかが課題である。

・欧米の大学では、アフタヌーンティーのように、そのような交流の場に、強制的に出されて議論するような環境がある。このような場は結構重要である。それをきっかけに、まったく違う分野が協力し大きな成果になることもある。このように専門外の研究者が集まる場は必要である。上から大きな課題を与えられて、集まってくる場、違う分野の先生が集まる場が必要だが、日本の大学にはそういう機会があまりなく、研究者同士横のつながりが少ない。

意見交換における主な意見

(人材育成)

- ・コーディネーターは、上流や入口からバトンを渡すように時間軸を管理して、議論を他分野につなげていける人、バリューチェーンを理解している人がよい。

(評価)

- ・Well-beingを評価する単位はない。単位がないと、定量的な評価ができない。ひとつの大学ではできないため、学会で議論しないと。それが学会の役割。
- ・学会には論文の査読機能があり、透明性を持ち、公平公正に評価するプロセスがある。
- ・学会の特徴は知の集約。立場としてはニュートラル。そういったところなので客観的に評価できる。どのような成果、研究を認めるかは、学会の課題である。メトリックをうまく決められると、研究も進む。まずは妥当なメトリックを作って、動きながら、進化させればよい。

(総論)

- ・グローバルに出ていかないと衰退しかない。そのためには、グローバルでの価値観を理解し、ビジネス、価値観を作らないと世界には通用しない。
- ・様々な文明、宗教、価値観を考えながら進めていかなければならない。そして、そのためには、日本が世界の中での位置を知ることが必要であり、総合知はその点でも重要。